

## ブロッケン妖怪

芭蕉が「奥の細道」の旅で山形の立石寺に立ち寄って、閑（むず）かさや岩にしみ入る蟬の聲」の俳句を詠んだのが三〇〇年ほど前の梅雨明けま近かの七月一三日。そして五月雨の句を残して最上川の急流を船で下って酒田にでて、修験者の霊場、羽黒三山を訪れた。

同行した弟子の曾良が書いた随行日記が後に発見されたが、そのなかに旅の折々の情景や日程、天気などが詳しく書き留められていた。 只

日（七月一二日）天気吉。登山三里。：略。：、行者戻り小屋（9合目）有。申の上尅（午後三時半頃）、月山二至。先、御室（頂上）ヲ拝シテ、角兵衛小ヤニ至ル。雲晴テ来光ナシ。タニハ東ニ、旦（アシタ）ニハ西ニ有由也。：。」角川文庫、おくの細道」と月山登山の模様が日記に書留られ、『来光』すなわちブロッケンの妖怪をみることで済まず残念がっている有様がみえる。

このブロッケンの妖怪とは、霧に包まれた山の頂上で背後からの太陽の光で、人の影法師が雲海や霧の中に浮かんで、その回りに虹のリング

が映っているものである。人が動けばそれにつれておおきな影法師が動く神秘的な現象で、ドイツのブロッケン山でよく見ることができるところからそう呼ばれている。空气中に百分の1ミリほど極微の水滴や氷晶が無数に浮んでいる雲や霧に、太陽の光が差し込んできたときに起こる光の回折現象でできるもので、悪天の兆しの月や太陽の暈（かさ）と同じものである。霊山である月山では修験者も多く不思議な影法師も印象深く伝えられ、俳人に耳にも入っていたのだろう。

「雲晴テ来光ナシ」で天気がよくては見えないのも当然、 夕ニハ東ニ、旦（アシタ）ニハ西ニ有由也」と、夕方は西に太陽が傾く東に見え、旦（朝）には太陽が東なので、西でると正確な知識に裏付けられている。湯殿山に登り、再び月山に戻って山を降りた一行は、 甚（はなはだ）「勞ル」と、来光を見られず仕舞で老骨に疲れが残ったようである。

いまの時代で簡単にブロッケンの妖怪を見るには飛行機に乗ればよい。眼下に広がる真っ白な雲海に機影が映ってその回りにカラーの回折リングをしばしば、見ることができるが、

ブロッケン現象そのものである。芭蕉や曾良が聞いたらさぞ驚くであろうが、同時に味けないと一笑に付すことだろう。

（村松 照男）